



福島からの変革 ～21世紀型資質能力の育成～

福島県立ふたば未来学園高等学校長

丹野純一

1 開校の経緯及び背景

(1) 地域の状況

巨大地震と巨大津波、そして原発事故という、人類が経験したことのないような複合災害に見舞われ、いまなお、10万人の福島県民がふるさとを離れた地で生活しており、避難している人に限らず、多くの県民が抱える困難は、今なお続いている。

双葉郡をはじめとした福島県の各地域では、震災と原発事故がもたらした被害や放射線への対応などの深刻な問題だけではなく、日本のあらゆる地域が直面している、少子化、高齢化、過疎化の急激な進行、疲弊する産業など地域・コミュニティが直面する課題が、震災と原発事故により先鋭化している。双葉郡そして福島県はある意味で「課題先進地域」となっている。

教育においては、震災前双葉郡に5校あった県立高校（双葉高校、浪江高校、浪江高校津島校、富岡高校、双葉翔陽高校）は、県内外各地に設けたサテライト校で授業を続け、教育環境の整備に最大限努めてきたが、元の校舎での授業再開のめどが立たず、平成27年度から生徒募集を停止した。郡内で開校している高校が存在しない状況が4年間続き、双葉郡にあった高校の生徒数は約1500人から約300名へと激減してしまった。

(2) 子どもたちの状況

生徒たちは、避難生活を継続し、その多くは、避難先を転々としながら転校を繰り返し、仮設住宅での暮らしを続けている生徒もいる。中学校時代、転校した学校に馴染めずに、思うような学校生活を送ることができなかった生徒も少なくない。非常に困難な生活背景や生育過程を背

負った生徒たちが多い。

そうした生徒に対してどのような教育を行うか、これが大きな課題であり、おそらく今回の震災だけではなく、今後日本列島で起こりうるであろう災害により被災する子供に、どんな教育を行うか、世界中で繰り返される災害や紛争により心と体に大きな傷を負った子どもにどういった教育をするかということは、リスク社会を生きる我々に共通に課せられた課題だと考えている。

一方、こうした状況において、なんとかこのふるさとを取り戻そうという気持ちや志を持った生徒がたくさんいるということも事実である。

(3) 双葉郡教育復興ビジョン

このような中、避難を余儀なくされた双葉郡の教育長会が主催する「福島県双葉郡教育復興に関する協議会」（平成24年12月設置）が、平成25年7月末に、県立中高一貫校の設置を柱とする「福島県双葉郡教育復興ビジョン」を決定・公表した。同ビジョンにおいては、「いかなる状況下でも子どもたちの学びを保障する」姿勢で一致し、世界でも活躍できるような強さを併せ持った人材育成を目指して、幼、小、中、高、大が連携して今まで以上の教育を進めるとし、アクティブラーニングやふるさと科、留学等を取り入れた教育を提案した。双葉地区教育長会では、同ビジョンの検討と同時並行で、「双葉郡子供未来会議」を実施。子供たちの考える双葉郡の教育として『動く授業』『世界とつながる』『夢を見つけるたくさんの「小さな窓」』等のキーワードが生まれた。そして、県と双葉郡地方町村会の協議の結果、中高一貫校については平成27年4月開校とされ、設置場所については広野町

とすることが決定された。(中高一貫教育は、連携型で開始)

2 教育目標

(1) 建学の精神

以上を踏まえ、さらに、現在の我が国の高等学校教育の課題と目指すべき方向を深く考えた末、学校のグランドデザインを描いた。

本校の目指す教育は「未来創造型教育」である。先述したように、双葉郡をはじめとする福島県は、いわば課題先進地域となっている中で、私たちは、これまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、持続可能な循環型社会の実現、自立した新たなコミュニティ・まちづくり、再生可能エネルギー社会の実現など、新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、変革を起こしていくことが求められている。それは、震災と原子力災害を経験した私たちに、未来から課せられた使命、ミッションということもできる。

自らを変革し、地域を変革し、社会を変革する「変革者たれ」。この言葉をこの学校の建学の精神とした。

(2) 校訓～変革のための理念

そして、私たちが変わるために、社会が変わるために、大切にすべき価値観や考え、変革のための理念として、「自立」、「協働」、「創造」を掲げ、これを校訓とした。既存の価値観、システムに過剰に依存することなく、自律心を持って自分の頭で考えぬく主体性を身につける、「自立」。そして、どんな困難な課題であっても、多様な主体と共に力を合わせて立ち向かう、「協働」。さらに、これまでの社会のよさに磨きをかけながら、新しい生き方、社会をつくりだしていく、「創造」。

しかし、「自立」、「協働」、「創造」は、福島の双葉郡の子ども達や地域の現状を考えると、本校生だけではなく、地域にとっても重い課題だととらえ、地域、世界と共に歩む本校の変革のための理念、すなわち校訓としたものである。

3 カリキュラム

総合学科とし、文系・理系の上級学校に進学するための発展的な科目を学ぶことができるアカデミック系列、職業人を目指すために必要な専門科目を学ぶことができるスペシャリスト系列(農業、商業、福祉)、スポーツ分野での高度な技能の体得などに対応したトップアスリート系列の3系列とした。

また、当面休校となる双葉郡のサテライト校の学科内容や特色、各校の伝統を受け継ぎ、普通科目及び専門教育の科目について、幅広く学ぶことができるものとした。たとえば、富岡高等学校で、富岡・楡葉・広野の3町4中学校及び日本サッカー協会、県内の大学等、関係機関と連携しながら推進してきた、「真の国際人として社会をリードする人材の育成」を基本目標とする「双葉地区教育構想」や、夏の甲子園大会3度の出場経験を持つ双葉高等学校の野球部など、各校における特色ある活動を学習活動に反映させた。

なお、トップアスリート系列の生徒のうち、日本サッカー協会のアカデミー福島の子供たちは、静岡県立三島長陵高等学校の御協力を得て、三島で学んでいる。また、ピクトリープログラムのバドミントンの生徒たちは、猪苗代高等学校の御協力を得て、猪苗代で学んでいる。

4 入学生(1期生)の状況について

(1) 入学時の状況

広野の本校舎に125名、三島長陵校舎に18名、猪苗代校舎に9名、計152名の生徒が入学した。うち、三島長陵校舎はサッカー、猪苗代校舎はバドミントンの生徒であり、本校舎を含め、富岡高校が中心となった双葉地区教育構想を引き継ぐ。

本校舎の125名のうち約8割が震災時双葉郡に居住していた生徒であり、他は、いわき市をはじめ、県内各地から入学してきた生徒である。双葉郡のすべての町村から入学し

てきた。本校舎通学生の半数は寮生活である。

志願者全員が合格し、学力差が非常に大きい。また、避難先を転々とした生徒も多く、様々な課題を抱えて入学してきた。

(2) 学校生活の状況

① 全国から注目される中、先進の教育を展開しているが、生徒、教員ともに手探りながらそれぞれの目標を定め、授業、部活動などで落ち着いた学校生活を送るようになっていく。

② 避難先を転々とし、現在も厳しい環境にある生徒が多いが、それぞれが困難を乗り越えて新しい一歩を踏み出している。中学校時代つまづいた生徒も、ほとんどは、毎日学校に来て、学習や部活動などで充実した学校生活を送っている。

5 特色ある取り組み

教育目標を実現するため、開校初年度からスーパー・グローバル・ハイスクールの指定を受け、研究開発を行っている。

スーパー・グローバル・ハイスクール

本校におけるスーパー・グローバル・ハイスクールの取り組みは、「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」を研究開発テーマとし、片方の足は地域に、もう片方の足は世界へ、この両足でしっかりと立って、地域の抱えるグローバルな課題解決に挑戦する実社会での学びを通して、解のない課題に挑戦する主体性、協働性、創造性を身につけていこうというものである。そこでは、従来的一方通行の受動的な学びだけではなく、アクティブラーニング（主体的・協働的学習）が欠かせない。以下、その主要な取り組み、本校の教育活動の概要について述べる。

2016/3/7改定

福島県立ふたば未来学園高等学校

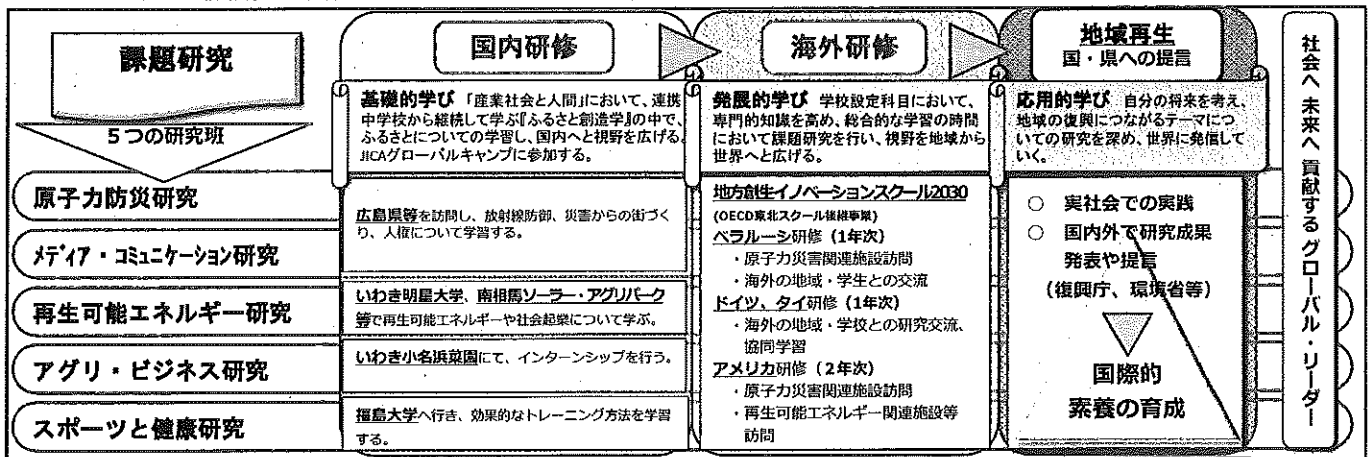


スーパーグローバルハイスクール事業

～原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成～

◆ 目的：社会課題に対する関心と深い教養に加え、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、福島県の復興に寄与するグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。

- 国内研修から海外研修へと視野を広げるとともに、未来創造に向けた実践を通して学んでいく。
- OECD、JICA、福島大学、地域内外の企業、イノベーションコースト構想関連機関等との密な連携を行っている。



先進の学びで地域へ、地域から世界へ、未来へ 社会に貢献する人材の育成

各学年次での実社会での実践を通じた学習

「産業社会と人間」2単位

- ◆ ふるさと創造学として、地域の復興の課題多面的に見つめ、復興への取組を実践することを通して、自らの生き方を考える授業。
- ◆ 平田オリザ氏の指導を受けながら、地域をフィールドワークし、復興に向けた課題を演劇として表現する授業。
- ◆ 「地域とアート」地域と祭り「地域とスポーツ」等のテーマごとに分かれ、ふたばの教育復興応援団の指導を受けながら地域復興の実践に取り組む。

「学校設定科目」2単位、「総合的な学習の時間」5単位

- ◆ 5つの研究班に分かれ、学校設定科目で関連する知識を学びながら、総合学習の中でグループでの研究・実践や、個人研究に取り組む。
- ◆ 風評被害の払拭に取り組み農家での就業体験。
- ◆ 国際フォーラム、総合学術研究発表会での発表。
- ◆ 福島・国際研究産業都市(イノベーションコースト)構想との連携。
- ◆ OECD地方創生イノベーションスクール2030への参画を通じた、海外の高校等との研究交流等。

1年次

2年次

3年次

ふるさと創造学

1年次には、双葉郡の中学校などと連携し、地域と世界をつなぐ探究型学習、「ふるさと創造学」を展開している。ふるさとの未来を考えることを通して、全国・世界の地域の課題を解決する力を育てようとするプログラムである。

○ 演劇の授業

昨年前期、本校「ふたばの教育復興応援団」の一人である劇作家・演出家、東京芸術大学アートイノベーションセンター特任教授平田オリザ先生を講師として招聘し、前期授業「産業社会と人間」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通じて「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分たちが思考を深めることをねらいとしている。復興のために誰もが努力しているのにうまくいっていないという事実を前に、地域の復興の課題に向き合った。課題を発見するために、事前に調べ学習をし



津波浸水区域を歩く

た後、地元公共機関や商店、病院、企業などを訪問しインタビューを行う。その際、「こういう課題の解決のために大人がこのように頑張っています」で終わるのではなく、「みんなが、善意で、一生懸命頑張っているけれど、それでもうまくいかないことがある。そういう解決困難な課題をみつけてくる」というようなフィールドワークを行った。訪問先でのありのままの事実や悩みを持ち帰り、議論しながら復興のための核心

的な課題を見つけ出す。立場の違いから生じる課題や複雑に絡み合う事象から解決できない課題があることを認識する。台本制作は現実的でない和解や安易な解決にならないよう留意しながら、答えが見つからないままの葛藤の場で終わり、生徒はその後2年次から展開される課題研究を通じて解決策を探究する。

興味深いことに、この授業において生徒たちが試される、あるいは身につける力は、これから求められるであろう学力だということだ。リーダーシップの取り方で躓いたり、ロジカルシン

迫真の演技！



キングではない「対話」を作るよう求められ躓いたりしながら、一方では、ふだん、人前で発言しない生徒が、この学習の中で発言することができるようになったという場面も見られた。

また、劇を作り上げる過程で、自分や家族が置かれた境遇と葛藤しながらも、東電と被災者との間の対立、除染作業員と住民とのあつれき、風評被害などの重いテーマに取り組んでいた。

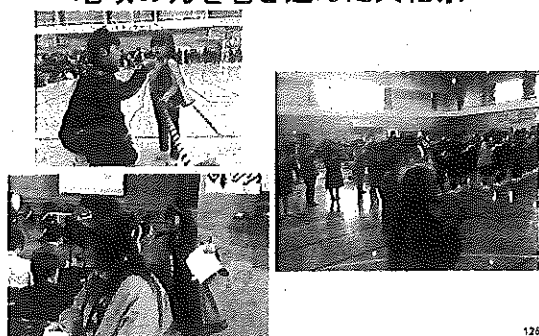
○ 未来創造ゼミ

1年生の後半の「産業社会と人間」と学校行事「双来祭（文化祭）」においては、与えられた問いに答えるのみではなく、自ら課題を設定する力、多様な価値観を理解した上で絶対解ではなく納得解に辿り着く力、関係者を巻き込み価値や成果を最大化する力、諦めずに何度でも挑戦する力を身に付けるために、「未来創造ゼミ」という課題解決型、価値創出学習を行った。全生徒が、スポーツの力、祭りの力、ドラマの力、アートの力の4つのグループに分かれ、「今ここにあるリソース（地域資源）」を最大限に活用して、

未来にあるとよいと思う「新しいスポーツ」、「新しい祭り」など、新しい価値創出に取り組み、その成果を、11月3日の「双来祭」で発表した。

京藝術大学学長)とともに指導にあたった。生徒たちの学びは自分たちで完結するものではなく、地域と共に、世界と共にあることを示した。

地域の方を巻き込んだ文化祭



各グループに全教職員を担当者として配置し、「ふたばの教育復興応援団」を中心とした外部講師陣(為末大氏(一般社団法人アスリート・ソサエティ代表理事)、筋内 道彦氏(クリエイティブディレクター)、平田オリザ氏(劇作家・演出家・東京藝術大学特任教授)、宮田亮平氏(東

未来創造探究

今後の中心的な取組となるのが、2年次における探究活動、実践である。総合的な学習の時間「未来創造探究」2単位、学校設定科目「未来創造学」2単位で実施する。(下図参照)

新2年生全員が6つの探究班(原子力防災、メディア・コミュニケーション、再生可能エネルギー、アグリ・ビジネス、スポーツと健康①②)のどれかに所属し、1年次に取り組んだ「ふるさと創造学」(「産業社会と人間」)や各学習によって生徒が気づき、発見した、地域が直面している課

平成27年度入学生 平成28年度SGH 6つの探究班概要(案)

課題探究で設定する生徒の学習・実践の目的			
1. 福島県及び企業・関係団体、大学・国際機関と連携し、グローバルな課題である「原子力災害からの復興」をテーマの中心に据え、その原因、背景、過程について同種事例なども参考にしつつ、研究・検証し、グローバルな視点から地域課題の解決及び地域再生の実践を行う。 2. 国内外での研究成果発表や提言を行う(復興庁、環境省、自治体等)			
	原子力防災探究	メディア・コミュニケーション探究	再生可能エネルギー探究
対象となる生徒	<ul style="list-style-type: none"> ○ アカデミック系列(理系)生徒 ○ アカデミック系列(文系)生徒 ○ 当該分野の興味関心を持つ生徒 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アカデミック系列(理系)生徒 ○ アカデミック系列(文系)生徒 ○ 当該分野の興味関心を持つ生徒 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アカデミック系列(理系)生徒 ○ アカデミック系列(工業)生徒 ○ 当該分野の興味関心を持つ生徒
探究内容例 (生徒と担当教員とで新年度に決定)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築について探究する。 ・ エネルギー、コミュニティ再生、産業再生等、新たな社会システム創造を模索 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 海外を含めた、異文化の方々に向けた情報発信やコミュニケーションの有効な方策を探究する。 ・ 風評や風化のメカニズムの研究 ・ 情報が社会に与える影響の研究 ・ 様々なメディアの可能性や先端技術・事例の研究 ・ 実際のメディア制作 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 福島の現状を踏まえた、望ましい人間社会と、地球環境やエネルギーの関係性について探究する。 ・ 諸外国のエネルギー政策の研究 ・ 再生可能エネルギーの先端技術の研究
	アグリ・ビジネス探究	スポーツと健康探究(1)	スポーツと健康探究(2)
対象となる生徒	<ul style="list-style-type: none"> ○ スペシャリスト系列(農業)生徒 ○ スペシャリスト系列(商業)生徒 ○ 当該分野の興味関心を持つ生徒 	<ul style="list-style-type: none"> ○ トップアスリート系列生徒 ○ 当該分野の興味関心を持つ生徒 	<ul style="list-style-type: none"> ○ スペシャリスト系列(福祉)生徒 ○ 当該分野の興味関心を持つ生徒
探究内容例 (生徒と担当教員とで新年度に決定)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 福島の復興につなげる、今後の農業とビジネスを探究する。 ・ 農林漁業生産と加工・販売の一体化や、地域資源を活用した新たな産業の創出を促進するなど、農山漁村の6次産業化を推進(農業「総合実践」商業「商品開発」等で実践) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 福島の地域を、スポーツを通じて豊かにする方策を探究する。 ・ 総合型地域スポーツクラブによる地域の絆の強化、健康増進、子供たちのスポーツ環境支援、トッププロと地域スポーツの好循環 ・ 五輪を契機とした地域社会の活性化の方策 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 福島の地域において、少子高齢化が加速する中での健康長寿の実現の方策を探究する。 ・ 中核病院、地域医療、介護、福祉が結びついた、地域包括ケア

題について、国内外の他の地域ではどのように取り組んでいるのかを見ながら、ゼミ形式で探究的な学びを深め、地域再生のための論文を執筆し、国内外で研究成果を提言していく。実施に当たっては、地歴・公民、理科、英語、国語等や小論文指導と連携しつつ、大学や企業等の専門家の協力・助言を得ながら進める。

3年次には、総合的な学習の時間「未来創造探究」(3単位)において探究を継続し、論文にまとめ、成果を国際会議の場で発表する。特に再生可能エネルギー研究班は、「地方創生イノベーションスクール2030」に参加し、海外の高校・大学・自治体・企業・NGOと連携し、「Think Green」をテーマに生徒自らプロジェクト学習をデザインし、実施・検証する。国際シンポジウムを開催するなど実社会での実践を通して個々のコンピテンシーの成長へとつなげる。

海外研修

自分たちの地域が直面している課題について、国内外の他の地域では、どのように取り組んでいるのかを見ながら探究を深めるため、海外研修を行っている。

(1) ベラルーシ研修

7月28日(火)～8月7日(金)の11日間、生徒7名参加。

英語で創作劇を上演し、福島の現状を伝えた。期間中、キャンプ施設「ズブリョーノク」に宿泊し文化活動やスポーツを通じた交流活動



福島現状を説明

も行った。放射性物質検査機を製造する「アトムテックス」、世界から注目を集める人気ゲーム会社「ゲームストリーム」などを訪問した。

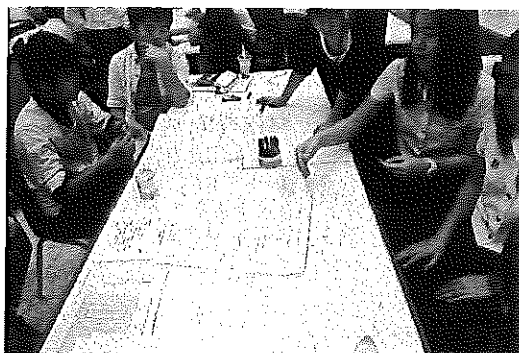
生徒からは、「原発事故でつらい思いをしたが、原発のつながりで生まれた交流がある。貴重な経験ができた。」「将来は医師になりたいと思っているので、チェルノブイリ原発事故から多くを学び、地域医療を通じて福島の復興に役立ちたい。」等の感想が寄せられた。

(2) タイ研修

平成28年1月5日(火)～10日(日)

4泊6日 生徒14名参加。

○ 日本大使館とチュラロンコン大学で、福島の現状についてプレゼンテーションを行った。原発事故とその後の風評被害について、大学生にはあまり知られていなかったことから、正確な情報を世界に向けて発信し続けることが、いかに大切なことであるがわかった。また、学生と「再生可能エネルギーの共同開発」や「女性の社会進出」についてディスカッションを行った。違いがあるからこそ面白く、学ぶべきことがあることを知る貴重な経験ができた。



○ 国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)から「スマートコミュニティ実現に向けた課題と取り組みについて」の話聞いた。再生可能エネルギーの安定供給へ向けて、蓄電池の技術開発や水素について質問するなど、積極的に活動する姿が見られた。

○ 現地の日本企業で活躍されている方々と交流した。

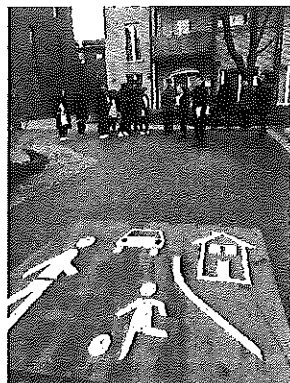
(3) ドイツ研修

平成28年1月5日(火)～1月10日(日)

6日間 生徒9名参加

- ハイデルベルク市内スーパーマーケットでの住民目線でのゴミの分別視察、リサイクルの発想だけでなく家庭にごみを残さないという考えが背後にあることを学ぶ。
- ライン川支流のネッカー川にある水力発電所や、ランドヴァッサー地区の、ごみ処理から出るメタンガスを利用した、コジェネレーションシステムを見学した。
- フライブルクの環境保護政策について、元環境局責任者ヴェルナー博士の講義。

- ヴォーバン団地
公共交通機関である
トラムを推進
し、自動車の使用
率を減らしCO2
排出を減らす政策
を行っている。



- フライブルクの環境マネジメントの背後には、環境全体を見て、バランスよく効率的なアイデアを出し、それを実現させていることである。コジェネレーションシステムのように、発電だけでなく余熱を利用するシステムや、車の使用量を減らすために、トラムだけでなくパークアンドライドシステムや町自体の作り方やルールを変えることにより、住みやすく環境にも優しいトータルデザインができるということである。

- NPO 団体エコステーション訪問

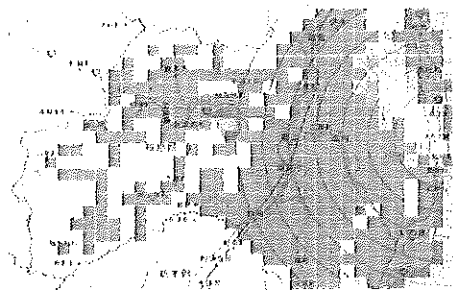
環境都市を支えるNPO団体(エコステーション)での現地高校生・大学生との生徒交流、記念植樹、生徒による福島の実状とこれからのビジョンについて発表し、そのことについての意見交換を行った。

- ドイツ人の環境に対する意識は非常に高く、日ごろからエコ生活を送っている。また、行政政策についても非常にシステムティックに考

えられたものである。ドイツでは、単独の事象として問題解決を図ろうとするのではなく、総合的・複合的な視点で行政政策が行われている。今後の課題として、「地方創生イノベーションスクール」、2年次からの「探究」に対して、いかに研修成果を活用していくか、また、次年度の海外研修の効果的な在り方も検討していきたい。

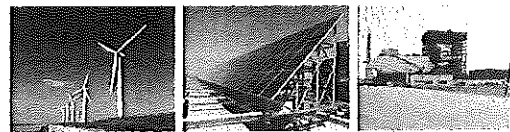
＜生徒プレゼンテーション資料例＞

Fukushima exclusion zone



Potential sources of energy

《Wind Energy》 《Solar Energy》 《Biomass energy》



Transition from non-renewable to renewable energy

Reconstruction from a nuclear disaster



We want to make our hometown a symbol of the energy revolution like Hiroshima and Nagasaki.

国内研修

- 越後妻有大地の芸術祭2015

後期の「産業社会と人間」の4つのワーキンググループのうち、「祭りの力」「アート」の力に関連する研修として「越後妻有大地の芸術

祭」に参加し、地域を活性化する方策を探求する学習を行う。また、往路途中、再生可能エネルギー施設を視察し、地熱発電について学んだ。

たくさんの企業、団体、個人と地域住民とが協働し、自然条件の厳しい越後妻有の地域を活性化させることに成功している事例から、双葉郡の私たちも地域づくりについて大いに学ぶことがあった。

○ 島根県立隠岐島前高等学校との交流

9月20日(日)～9月22日(火)の2泊3日で、島根県立隠岐島前高等学校の生徒と共に、広野町・川内村において研修を実施した。

震災後も有機農法を続け、風評被害の払拭に努めている農家を訪問したり、仮設住宅・集会所を訪問し、住民の方々との交流を実施した。里山の風景を守ることが帰還につながることで、帰還のためのコミュニティ形成と利便性について学習した。

川内村でのフィールドワークを実施し、出会った人びとの働き方・生き方から、地域の未来について考える時間を持った。

○ 福井県鯖江市 まちづくり体験ツアー研修

10月10日(土)～12日(月)の2泊3日で、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会が主催する他地域交流事業「福井県さばえまちづくり体験ツアー」に参加した。

○ 広島研修

2年次以降の課題研究に向けて広島県を訪問し、現地の高校生とともに、原爆被害からの復興と平和に向けた取り組みについて学習した。あわせて2014年の豪雨災害現場のフィールドワークを通じて、防災のあり方について学習する契機とした。また、広島県を含む東北からの避難者団体とも意見交換を行った。

○ JICA グローバル・ユース・キャンプ

福島県二本松市にある海外青年協力隊訓練所で、全校生が合宿を行った。

訓練生と共に行動し、地域社会が抱える問

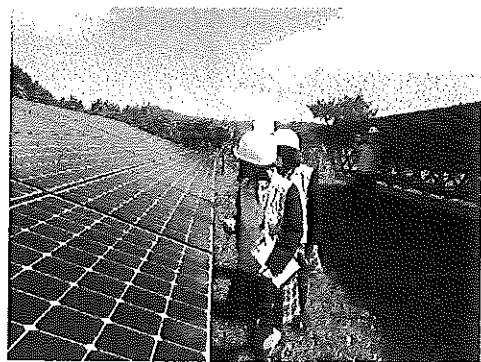
題をグローバルな視点から解決する方法を学んだ。2年次以降の課題研究に関するテーマで、講義・演習を行うことにより、研究テーマを選択する材料とした

○ 産業技術総合研究所福島再生可能エネルギー研究所見学

エネルギーネットワーク、水素キャリア、風力エネルギー、太陽光、地熱、地中熱について学習することができた。特に水素キャリアの利用として、大型貯蔵タンクと次世代コージェネエンジンについて知ることができた。

○ 福島空港メガ・ソーラー施設

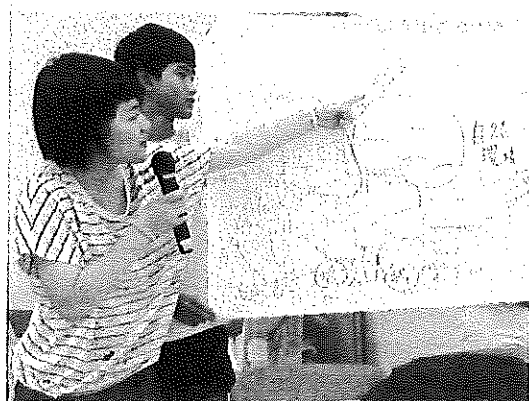
福島空港に隣接する太陽光発電所(1200kW)で体験学習をした。



福島空港メガ・ソーラー

○ 地方創生イノベーションスクール2030

OECD東北スクールの後継事業である「地方創生イノベーションスクール2030」に参加し、将来生じる少子高齢化や環境問題等の全国の課題を学び、復興を超えた持続可能な地域作りを構想している。今後探究活動でさらに構想を深めるとともに地域で実践し、



平成29年夏に国際会議を企画・実践して提言を発信する。

外部講師

○ 山崎直子氏講演会

宇宙滞在体験談を通じて、自分の置かれている立場を客観視する力、俯瞰して見る力を養った。多様な価値観の人間同士において、良好な人間関係づくりのためのコミュニケーション力、課題解決力の重要性を認識させた。

○ 企業協働ワークショップ「データに基づいた企画作り～海外販売戦略立案～」

実際のビジネス社会の最前線で活躍している企業と協働して、社会がどのような仕組みで動いているのか、高校で学んでいる知識・データは社会においてどのように活用されていくのか、という理解を深めるためのワークショップを企画・実施した。世界最大の経営コンサルティング企業であるアクセンチュア株式会社と協働した。生徒にとって、ビジネス現場の最前線で活躍している社員と直接ふれあい、会話・議論を通じて考え方を学ぶという経験だけでも価値があると考えた。

○ いわき明星大学 東之弘先生講演会

近年、世界各地で表出している異常気象について、生徒や教師が体験する気象現象や、ニュース等で目にする内容に触れ、世界の科学者が集めた科学データに基づいた解説をしていただいた。

また、再生可能エネルギーの必要性・重要性についてお話いただき、化石燃料や原子力発電に頼らない電力開発ができるか、今後の教育のあり方や産業構造の転換について考える機会となった。

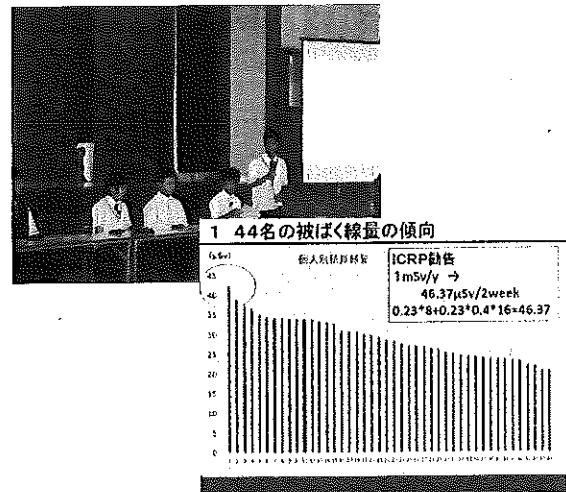
地域での活動

○ 広野町国際フォーラム

アメリカ、インドネシア、スリランカ、フランスなどの海外からの研究者15名を含み、延べ1300人が参加した。本校からは、ベラルーシ研修に参加した7名と社会起業部の8名が参加した。

4月～7月に授業で取り組んだ「演劇」のうち、今夏ベラルーシ共和国で演じた創作英語劇を披露した。また、ベラルーシ共和国研修の様子を報告した。

来場者から多くの称賛が与えられた。特に演劇では、原発事故後、多領域において様々な課題や葛藤が渦巻く中、その複雑に絡み合う内容の神髄を的確に表現しているというコメントが寄せられた。



また、Dシャトル（電子式個人線量計）を2週間装着した測定結果について、広野で生活した生徒と期間中にベラルーシを訪問した生徒の結果とあわせて提示された。

復興に関わり、学校教育と行政・地域住民とが繋がる良い機会となった。

○ 社会起業部

本校には、「地域活性化」を目標とする「社会起業部」という部活があり、生徒が自ら地域を舞台とした多様なプロジェクトを展開している。依然として多くの住民が避難生活を継続する町の空き家を活用してお年寄りや高校生との交流スペースを作る、地域の人たちが集えるカフェを作る、震災後再開した町の夏祭りに出店を出すなど、精力的に活動している。

○ 政策提言

内閣官房主催の「地方創生☆政策アイデアコンテスト2015」で、900以上の応募の中から最終審査に進出した本校の生徒が、見事に協賛企業賞を受賞した。テーマは「未来につなげる新商品プロジェクト！～高校生と商店街のコラボでみんなを元気に～」であり、双葉郡の商業の現状についてデータを分析するとともに、地元の町長や商工会の方などからお話を聞き、政策の提言を行った。

○ 双葉郡内の高校、中学校等との連携

来年度末に休校となる双葉郡内のサテライト高校5校の生徒会に働きかけ、交流会を継続的に実施している。生徒の発案で、10月に行われた双葉郡8町村の祭り「ふたばワールドinならば2015」で合同ブースを出展し、地域に各校の取り組みや復興への想いをアピールした。また、双葉郡のサテライト校生とともに、休校後も歌い継ぐ歌「四季双歌(しきそうか)」をボブ・ジェームス氏と渡辺俊美氏の協力を得て作り、本校生徒を含めた双葉郡の高校生たちがゴスペラーズと一緒に歌った。

双葉郡内の中学校とは8月に交流会を実施し、ふるさと創造学で連携している。12月には、郡山中央公民館で、第2回ふるさと創造学サミットが開かれた。原発事故で避難を余儀なくされた双葉郡8町村の小、中、高の子どもたちが一堂に会し、各校で取り組んでいる「ふるさと創造学」の学習発表を行った。今年は双葉郡のサテライト高校、ふたば未来学園高校も参加して、各町村等のブースごとの発表形式となり、当日はにぎやかに、各町村、各学校ごとに特色ある発表が行われた。町、村ごとの歴史や伝統、文化のほか、直面する課題解決のための提言等、とてもすばらしい発表がいくつもあった。

○ 地域連携施設づくり

平成31年4月へ向けて、現在、新校舎の設計を進められているが、その中で、地域の方々、生徒、教職員、設計業者等による、新校舎設計

に関するワークショップを開催している。地域と学校が協働する学校、共に夢を実現する学校を描き、それを具体化するにはどんな施設が必要か、熱を持って話し合っている。

○ 学校支援地域本部

双葉郡の8町村のコーディネーターが集まり、双葉郡の学校教育を支援する地域本部が

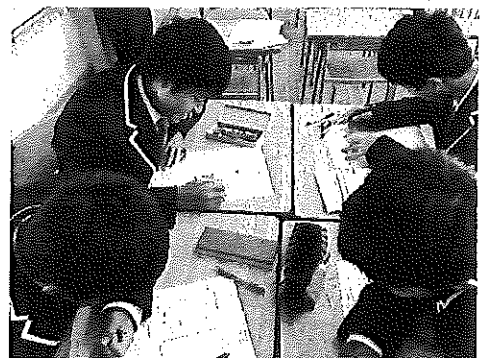
アクティブラーニング

結成された。今後、継続的な支援体制の構築を進め、学校と地域をつないでいく。

先述したような産社や探究学習でのアクティブラーニングにより身に付けたスキルをもとに、各教科においても、各教職員がアクティブラーニングにチャレンジしており、様々な試みがなされている。

○ 学習の定着率は、「講義」は5%であるのに対し、「他の人に教える」のは90%であることを踏まえてワールドカフェという手法を導入した数学の授業。

○ 今後、後述するルーブリックと関連づけて、総合などでの探究と各教科での探究を実際に結びつけた実践を深めていく。



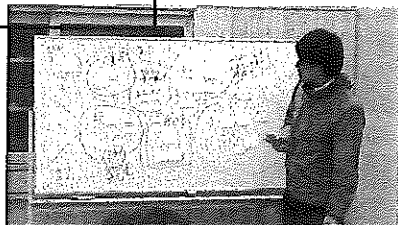
教員研修

○ 未来研究会

年度当初に、学校経営・運営ビジョンを念頭において、「本校で育てたい生徒の姿」をイ

メージし、どういう力が必要か付箋に記入、グループ化し、概念図にマッピングしながら、意見交換し職員全体で育成したい生徒像のイメージを共有した。

例) 人間関係調整力
他者の異なる考えを理解し、受け入れ、集団の利益に向かって力を合わせて行動することができる人間



後に、各班から出た「育成したい力」

をカテゴライズしながら整理し、本校のルーブリックを作成したが、この研修を通じて明確になった本校の特徴として、協調性や思いやりを重視していることが挙げられる。東日本大震災や原発事故の困難を乗り越えていこうとする本校にとって重要な想いであり、校是「協働」をしっかりと受け止めた瞬間でもあった。この日以降、本校での教員研修会を「未来研究会」と称する。

○ 平田オリザ氏 講演

劇作家・ふたばの教育復興応援団の平田オリザ氏より講義をいただいた。

- ・ 5年後に大学入試改革がある。簡単なペーパー試験と、ユニークな大学毎の試験となる。見極めようとしているのは、例えば「ハードな状況でも論理的にしゃべれるか」「切羽詰まっても人の意見を聞けるか」「細かい作業をこつこつと出来るか」等の力である。
- ・ 大学によっては、地頭を問うために小手先の受験対策が出来ない問題を作ることにしている。この流れが加速し、大学入試改革の前倒し実施も始まっており、将来的な話では無く今の話として捉えて、高校でも取り組むことが必要。
- ・ 社会全体でこれからコミュニケーション能力が益々求められる。社会の変化に高校教育がついて行っていない。付加価値を付けられる人材にならない限り東北の復興は無い。

○ 田村 学 視学官講演

文部科学省初等中等局視学官 田村 学 氏による講演。

- ・ 教えられた知識はすぐ忘れるし使えないことが多い。学習形態として、文章を書かせたり、言葉にさせることで、知識と知識が繋がるからこそ使えるものになる。アウトプットすることを重視する必要がある。
- ・ OECDのPISA調査の結果から、「総合的な学習の時間」に力を入れている学校は、ほぼ100%学力が向上している。加えて、思考力が求められるB型問題に対しての正答率が高い。探究活動の過程を繰り返して意欲的に学ばせることが重要である。

○ 田熊美保 OECD教育局シニアアナリスト講演会

学力試験以外の方法も含め多面的に生徒の学習評価を行うことが求められる。世界的潮流や諸外国事例も参考に学習評価を。

○ 鈴木寛 文部科学大臣補佐官 講演会

「大学入試改革と本校における進路実現」

- ・ 「個別入試」については、相当記述、論述型となっていく。また、面接や集団討論では、学校で培われてきた主体性・協同性・創造性を評価していくこととなる。一般普遍解を導き出す力だけでなく、個別暫定解を見出し、一步を踏み出す力が求められる。それ故、指導要領改訂ではアクティブ・ラーニングやプロジェクト学習を重視していく。
- #### ○ 福島大学による支援

福島大学の教授を招き、アクティブラーニングに関する研修会が開催された。

学びを支える取り組み

○ ふたばの教育復興応援団による授業

平田オリザさんによる演劇の授業に続き、8月には宇宙飛行士の山崎直子さん、箭内道彦さん、9月には林修さん、10月は4つのゼミ※を開講し、生徒たちが地域の課題を乗り越えるプロジェクトを企画実践し、11月の学園祭で地域に向けて発表した。

* 宮田亮平学長「アート之力」、為末大さん「スポーツ之力」、箭内道彦さん「祭りの力」、平田オリザさん「ドラマの力」の4テーマ

そのほかに、前期は、三島長陵校舎、猪苗代校舎も含めた全校生の宿泊学習において小泉進次郎さんを迎えて意見交換を行った。

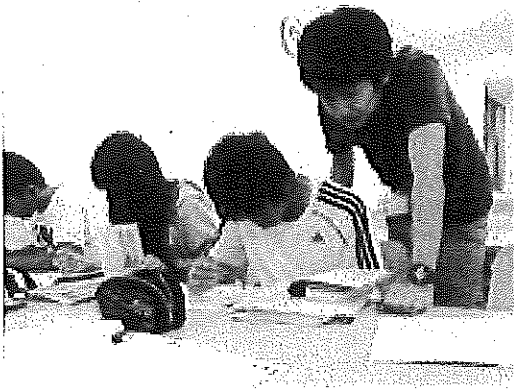


○ ICT（情報技術）の活用

生徒全員がタブレットを持って授業を受けるなど情報技術を積極的に活用している。

○ 大学生による学習支援

個に応じたきめ細やかな指導を行うため、中間/期末考査前10日間にわたって、10名以上の教職を目指す福島大学や慶応、早稲田などの大学生が寄宿舎に泊まり込み、生徒の学習を支援してくれた。



○ 徹底的な個別指導

英数国は各クラスを習熟度別に分け授業を展開している。そのほか、進路希望に応じて、放課後や朝の課外授業もさかんに行っている。

○ 立志寮

自宅からの通学が困難な生徒のための寮。エアコン付きの2人部屋で、とてもおいしい食事3食付きで月35000円（平成27年度の月額）。

6 評価について

年度当初の教員研修後、「育成したい生徒像」に必要な「育成したい能力」を分析し、共通項をまとめると同時に、本校校訓「自立」「創造」「協働」を意識し、福島県双葉郡教育復興ビジョン、OECD キーコンピテンシー等の内容を踏まえ、次頁のルーブリックを作成した。

ルーブリックの言葉の一つ一つに、教職員の感覚や想いが反映されている。例えば、「寛容さ～異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとする事ができる」という項目である。この地域は今、考えが違う者同士の衝突や、避難した人と帰還した人の中での気持ちのすれ違いなどに直面している。考えの違う他者とも関わり合い異なる考えも受け入れる「あたたかさ」が必要であると私たち教職員は考えた。この力が土台となって、別の項目に定義された「他者との協働力」が発揮される。

開校して真っ先に行ったのが、このルーブリ

ックの設定である。目指す資質・能力を明確化して、その目標に向けて学校をあげて取り組むために、よそから借りてきた表面的な言葉では無く、自分たちの視点・言葉で定義することを重視した、学校全体の欠かせない出発点である。指導の重点の設定も、授業の展開も、学習の評価も、学校評価も、このルーブリックと関連づけながら展開していくことを目指している。

このルーブリックによる調査は、「ふるさと創造学」(演劇創作)が終了した7月(遡る形で4月も調査)、1年間での学習成果を図るための3月と計2回実施し、3期分の結果を得た。また、3月期では1年間の学習内容のうち、どの事業が特に成長要因となったかも合わせて調査した。なお、3月の調査においては各生徒が自己評価を記入した後、生徒たちが相互に自己評価結果を見せ合い自身の評価の修正を行うピア・レビューを行った。これによって、ルーブリックにも盛り込まれているメタ認知力を高めることも目指している。

福島県立ふたば未来学園高等学校 人材育成要件・ルーブリック(7 July 2015 Ver.1)

学力概念	No	資質・能力(態度(まどと)	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
知識 Knowledge "What we know"	A	社会的課題に関する知識・理解 一般常識や基礎学力をつけながら、世界・社会の状況の変化やその課題を理解するための知識を身に付ける。	地域や社会の成り立ちについての基礎的な知識を得る。	地域の復興に向けた課題や、自らの課題についての基礎的な知識を得る。	環境・エネルギー問題など持続可能な社会実現に向けた課題や、世界の状況・課題について基礎的な知識を得る。	社会の課題について、習得した知識を深掘し、周辺情報や関連情報を集め理解する。	社会の課題について、目的の課題と関係する知識を俯瞰してつなげ、人に説明できるレベルまで理解する。
	B	英語活用能力 英語を使ってのコミュニケーションができるようになる。	英語でコミュニケーションをとろうとする関心・意欲・態度を持ち、自分のことについて英語で簡単に伝えられる。	自分の興味関心のあることや、地域について英語で説明できる。	地域や研究内容について、原稿を元に英語でスピーチし、簡単な質疑応答ができる。(OEFR B1L-B2)	地域や研究内容について、脚稿で英語でスピーチし、意見交換ができる。(OEFR B1L-B2)	地域や研究内容について、ストーリー、データ、事例などを交えながら英語で説明力を持って主張し、議論できる。(OEFR B1L-B2)
	C	思考・創造力 物事を論理的に考え、批判的思考で掘り下げ、スケールの大きな考え方ができる。	与えられた情報を整理できる。	目の前にある課題やその解決のための内容を論理的に掘り下げて考えることができる。	メディアを活用して情報を集め、情報を分析・詳細・活用しながら課題を発見したり設定できる。	現実と理想の差を踏まえながら、広い視野・大きなスケールで既知の弊害について批判的に考えることができる。	未知のことについても粘り強く考え、自分の考えや常識にとらわれずに創造的に考え、新たなアイデアを生み出せる。
技能(スキル・コンピテンシー) Skills "How we use what we know"	D	表現・発信力 どのような場でも臆ることなく自分の考えを発信でき、他者の共感を引き出せる。	自分の意見や考えを、集団の前で話することができる。	突然指名されたときでも怯せず、集団の前で、自分の意見や考えを相手に伝えるように表現することができる。	ICTを活用したり、データや事例を紹介しながら、自分の意見や考えを相手に伝えることができる。	多様な人々へ、相手の立場や背景を考えながら分かりやすく伝えることができる。	多様な人々へ、熱意とストーリーを持って胸に落ちる形で説得力ある発信を行い、共感を得ることができる。
	E	他者との協働力 異文化・異なる感覚の人・異年齢等を乗り越え、仲間と協力・協働しながら互いに高めあえる行動が取れる。	集団や他者の中で、決められたことや指示されたこと一人取り組むことができる。	集団や他者の中で、自分の役割を見つめ、個性を活かしながら行動でき、身近なメンバーの支援もできる。	集団や他者の中で、他者の良さにも共感し、新たなものを取り入れながら、共通の目標に向かって活動を進めることができる。	集団や他者の中で、互いに良い部分を引き出しながら、win-winの関係を作ることができる。ICTを活用して協働を促進することができる。	文化や国境を越えて、社会を変革する行動につなぐ、互いに高めあう同志としての関係をつくれる。
	F	マネジメント力 自分や組織での取り組みを計画性を持って進めることができる。	指示を受けながら作業を実施できる。	指示を持たず、自発的かつ責任を持って自分の作業を実施することができる。	全体にとって必要な作業を見出し、自分の作業に優先順位をつけて、複数の課題に同時に対処することができる。	作業の量や、全体スケジュールを把握し、チームやメンバーで作業を適切に役割分担することができる。	今後のスケジュールやリスクを把握して、リスクへの対応策をチームで確認しながら進めることができる。
人格(キャラクター・センス) Character "How we engage in the world"	G	前向き・責任感・チャレンジ 自分を意味ある存在として考え、物事をポジティブに捉え、決断し、決まらぬまで進んでいく。	自分を意味ある存在として考え、物事をポジティブに捉えることができる。	自分に自信を持ち、目の前の課題を自分のこととして積極的に捉え、主体的に取り組める。	集団や他者の中で、自分の役割を見つめることができ、すぐに解決方法が分からなくても考え続けることができる。	困難にぶつかっても自分の責任を果たす努力をし、困難克服のために、前向きにチャレンジし、まず行動できる。	困難にぶつかっても逃げずに自分の責任を果たし、失敗してもその失敗を糧とすることができる。
	H	寛容さ 異文化や考えの違う他者を受け入れ、思いやるあたたかさを持ち、協調して共に高めようとする事ができる。	集団や他者の中で、他者を気づかえる。	集団や他者の中で、相手の立場や考えを想像し、共感できる。	集団や他者に対して、思いやりをもって行動し、周囲の幸せを願えることができる。	考えの違う他者に対して、ユーモアを持って接する機会など、他者との違いを楽しめる。社会や環境の変化を前向きに捉えられる。	考えの違う他者の意見や存在を、自分や社会をより良くしていくための重要なものと捉えて受け入れられる。
	I	能動的市民性 社会を支える当事者としての意識を持ち、地域や国内外の未来を真剣に考えることができる。	所属する集団の一員としての自覚を持つ。	社会の一員としての自覚を持ち、社会の抱える問題に目を向けようとする。	社会をより良くしようと、社会の主体としての意識を持ち、社会がより良くなるための考えを持つことができる。	社会に貢献しようとする意識と自分の価値観を持ち、自ら社会に影響を及ぼそうとする。	社会・未来を良くしようとする意識を持ち、自分自身の意見を他者に真剣に話ることができる。
自らを振り返り変えていく力(メタ認知) Metacognition "How we reflect and learn"	J	自分を客観的に見る力 自分の言動や行動を俯瞰して見つめ直し、常に改善しようとする意識を持ち、次の行動に繋げることができる。	自分を客観的に見るために、自分自身で目標を立てることができる。	自分を客観的に見るために、自分の目標と現実の差を見つめることができる。	自分の目標に近づき方策を考え自ら行動することができる。	自分の目標の達成のための行動を、常に自分自身で見直して反省しながら、学び続け、次の行動につなげて取り組むことができる。	社会の中での自分の役割や意識を俯瞰して考え、自分の目標と関連づけて大域的に行動できる。

盛り込まれているメタ認知力を高めることも目指している。

○ 考察 今年度の3期分のアンケート調査、民間の客観評価テストの結果から、様々な能力の伸長が測定されている。全生徒の平均値で見ると、全体的に4月時点と比較して、7月、3月と全10項目すべてにおいて成長の様子が見られる。成長幅が大きいのは、A 社会的課題、C 思考・創造力、E 他者との協働力、F マネージメント力、H 寛容さ、J 自分を変える力である。様々な行事をこなしてきた生徒たちであるが、「演劇」など他者と交わりながら能動的に活動することが求められてきたことから、F マネージメント力や E 他者との協働力が高まったのではないだろうか。さらに、社会的活動の中で、A 社会的課題に目を向け始めている傾向がある。また、H 寛容さが高く伸びていることは、年度当初、全教員が「育成したい能力」として共通認識を強く持った「寛容さ、他者を大切に思う心」に沿う形で表出しており、本校生徒に対峙してきた教員の姿勢が如実に表れているともみることができる。

一方で、G 前向き・責任感・チャレンジの項目、B 英語活用力、I 能動的市民性、D 表現・発信力の伸びが低調である。こうした能力育成のために、海外研修や海外研究者との交流し大きな刺

激の場の設定もしたが、影響は一部の生徒で限定的であることが表れている。

7 今後の方向

今年度の経験から、年間を見通した実施計画を作成し、ループリック調査で課題が残る項目での改善を意識するとともに、教員間の情報共有を重視しながら展開する。

避難先を転々とし、現在も厳しい環境にある生徒が多いが、それぞれが困難を乗り越えて新しい一歩を踏み出している。中学校時代躰いた生徒も、ほとんどは、毎日学校に来て学習や部活動などで充実した学校生活を送っている。

前例のない取り組みを同時展開する中で、学校経営・運営上の課題は山積しており、その困難性も極めて高い。しかしながら、まさに「変わろう」としている生徒たちの姿こそが希望であり、この国の未来であると、日々思いを新たにしつつ、本校のすばらしい教職員と共に、失敗を恐れず挑戦し続けていきたい。

ループリック調査(125名平均値)

